

看護学生が小児看護学実習において患児と行った遊びの発達段階との整合性と有効性について

小池明日香、松井由美子、坪川麻樹子
新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】現代の看護学生は核家族化、少子化において子どもと接する機会が少ないと言われている。また、乳児期や幼児期は特に言語の発達が未熟であり言語でのコミュニケーションが難しい。そのため看護学生が患児とのコミュニケーションを困難に感じることも多い。学生が受け持つ期間も限られており、短期間の中で患児との関係形成やニーズを把握するためには早期に患児とのコミュニケーションをはかることが求められている。そのために有効となるのが遊びを通したコミュニケーションである。本研究では、小児看護学実習において学生が受け持ち患児に対して行った遊びについて明らかにすることで、患児の発達段階との整合性や学生が行った遊びが有効であったかを検証した。

【方法】小児看護学実習を終えた看護学生に対して質問紙調査を実施した。質問紙は 1)実習について 2)受け持ち児について 3)病棟実習で実施した遊び・目的の項目で行った。その内容を具体的に発達段階別に分類し使用した場面での効果を検証した。

【結果】以下アンケート結果を表1～3に示した。

表1 学生が行った遊びと発達段階

	0～1歳	1～2歳	2～5歳	5～12歳	12歳以上
感覚遊び	77%	41%	2%	7%	0
運動遊び	0	18%	16%	3%	0
模倣遊び	0	12%	23%	10%	0
構成遊び	0	18%	32%	43%	0
受容遊び	23%	12%	27%	37%	100%

表2 実施した遊びの目的

遊びの目的	件数	割合
コミュニケーション	53	50%
処置時のディストラクション	14	13%
処置・検査前のプリパレーション	5	5%
ストレスの緩和	31	29%
その他	3	3%

表3 患児と行った遊びに対する有効度

①とても有効だった	20%
②まあまあ有効だった	49%
③どちらともいえない	29%
④あまり有効でなかった	1%
⑤まったく有効でなかった	0%

表4 心身の発達からみた遊び¹⁾

0～1歳	1～2歳	2～5歳	5～12歳
感覚遊び	感覚遊び	運動遊び	運動遊び
	受容遊び	受容遊び	構成遊び
	構成遊び	模倣遊び	

【考察】表1と表4で示した発達段階に応じた遊びはほぼ一致しており、学生は患児の発達段階に応じて遊びを展開していたと考えられる。小児は感覚機能や運動機能、知的機能が急速に発達し始める時期である。「病気の子どもであっても成長・発達途上にあり、絶えず成長し続けていることには変わりはなく、遊びが子どもの成長・発達を促す²⁾」と言われており遊びを取り入れることは重要である。発達段階にあった遊びは患児の反応が得られやすいため学生は遊びの有効性を感じることができたと考えられる。表1の具体例としては感覚遊びではガラガラ、運動遊びではボール、模倣遊びではごっこ遊び、構成遊びでは折り紙、積み木、受容遊びでは絵本が多かった。一方で表2より遊びの目的としてコミュニケーションを主に行っていることが分かった。学生が行った遊びの目的の中には1～2歳に対してプレパレーションを行うなど発達段階を考慮していない回答もあり、目的にずれが生じていた。「看護学生にとって子どもとの関わりで何より優先すべきことが子どもとの関係構築である³⁾」といわれ遊びの目的まで考慮することは難しい。このことは遊びの有効性にも影響していると考えられる。しかし、有効であったという回答には目的に対してなのか患児の反応に対してなのか確ではないため質問の内容を具体化する必要があったと考える。

【結論】看護学生は小児看護学実習において患児の発達段階と遊びの整合性はほぼとれていた。患児に行う遊びの目的としては関係構築を主としておりずれが生じていた。

【文献】

- 1) 浅野みどり: 根拠と事故防止からみた小児看護技術, 医学書院, 第2版, 12, 2012.
- 2) 荘村多加志: 入院児のための遊びとおもちゃ, 中央法規出版, 第1版, 18-27, 東京, 1999.
- 3) 高橋亮: 入院中の幼児を対象とした遊びの検討ー看護師による援助の現状と課題ー, 桜美林大学大学院博士学位論文, 5-8, 2012.